

## 2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 社会学部・教授・吉田寿夫

研究課題： 1. 心理学的研究において個人内変動に注目することの意味  
2. クリティカル・シンキングの育成  
3. 統計的検定への過度の依拠からの脱却  
－効果量とその信頼区間などの活用－

研究課題： 2014年4月1日～2015年3月31日

### 研究成果概要

1) 研究課題の1と3（特に、3）に関わって、『「本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ごく初歩の統計の本」の補足本：その1』、『「本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ごく初歩の統計の本」の補足本：その2』の2冊の著書の原稿をほぼ完成させた。これらは申請者が以前執筆した『本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ごく初歩の統計の本』という統計書のまさに補足本であり、いずれも、1ページが1000字強の紙面で、350ページくらいのものになる予定である。前者は5章構成になっており、現時点では、後述する続刊の内容との関係で、統計についての学び方について述べる序章のみが未執筆である。また、後者は6章構成であり、現在、最終章である6章を執筆中である。なお、これらの2冊の著書に続いて『本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ちょっと進んだ統計の本：その1』、『本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ちょっと進んだ統計の本：その2』というタイトルの著書も執筆・出版することになっており、それらと同時に出版することになっている関係で、上記のように原稿はほとんどできあがっているが、出版は来年の9月くらいになる予定である。

2) 研究課題の1と3（特に、1）に関わって、日本行動分析学会の設立30周年記念シンポジウムにおいて指定討論者として話したことをまとめた『シングルケースデザインによる研究について思うこと、あれこれ』と題した論文を執筆した。本論文は、シングルケースデザインという研究法そのものやその適用の有り様などに対して思ったことを率直に述べた、大げさに言えば、非会員である者による「行動分析学会全体へのコメント」といった内容のものであり、まずはシングルケースデザインによる研究に強く共鳴していることを表明したのち、効果の持続性ないし不可逆性や般化に関わる結果の解釈、統計的分析の適用、論文中に記すべき内容などに関して、シングルケースデザインによる研究に対する疑問の投げかけを行なった。そして、それに続いて、『行動分析学研究』誌に掲載されている最近の論文に対する批判的コメントを行なった。なお、申請者が執筆した論文についてはすでに校正作業が終了しており、この3月または4月中には発刊される旨の連絡を受けている。

3) 研究課題の1と3に関わって、本年の8月26～28日に新潟大学が大会開催校となつて行なわれる日本教育心理学会第57回総会の『研究法におけるルーチンの見直し』という

タイトルの準備委員会企画シンポジウムにおいて、話題提供者の1人として、「皆になんとなく受け入れられてルーチン化した問題のある方法」ということに関して、あえて総花的に提示・解説をするとともに、このような現状を是正するための研究法に関する学習および教育のあり方などについての私見も述べることになっており、その論文集の原稿を作成した。なお、他のパネラーは、杉澤武俊（新潟大学）、荘島宏二郎（大学入試センター）、南風原朝和（東京大学）である。

4) 研究課題の1に関わるものである、2013年に『教育心理学研究』誌に掲載された『なぜ学習者は専門家が学習に有効だと考えている方略を必ずしも使用しないのか』というタイトルの論文が、2014年10月に2013年度の優秀論文賞を受賞し、研究の概要、方法（論）上の主なセールス・ポイント、今後の課題・展開などについて記した原稿を執筆した。本年5月に出版予定の『教育心理学年報第54集』に掲載されることになっている。

5) 研究課題2に関わるものとして、楠見孝・道田泰司（編）『批判的思考－21世紀を生きぬくリテラシーの基盤－』や山田剛史・林創（著）『大学生のためのリサーチリテラシー入門－研究のための8つのカー－』などの著書を参考に、クリティカル・シンキングの内容および育成に関わる資料を作成し、本年2月19日に、大阪府立豊中高校において、教員を対象とした講演を行なった。

6) 研究課題1と3に関わるものとして、大阪大学大学院基礎工学研究科の狩野裕氏の依頼を受けて、2014年8月28日に、大阪大学において、『データ科学特論Ⅱ：心理測定と心理統計』というタイトルの授業・啓発活動を、130名くらいの大学院生やさまざまな領域の研究者を対象に行なった。